

## 研究結果

本調査研究では、まず、韓国の若者の必須の日常空間であるインターネットの世界を調査し、彼らによる対日的な日本観を探ろうとした。但し、インターネット世界の隅々まで散在するそれらを全て調査することはほぼ不可能なので、彼らによるかような対日認識のトレンドが明確に表されていると言える、過去5年間（2002～6年）に韓国の3大インターネットサイトに登録された反日カフェのコンテンツを全て綿密に調査し（最初は5大サイトまで調査するはずであったが、研究費の削減により3大サイトに絞ることになった）、このような比較的体系的な作業を通じて、韓国の若者の反日的な関心事・認識の動向性の分析を試みた。その結果は別添1の資料集『韓国大手インターネットサイトの中に結成されているアンチ日本関連カフェ』（総386ページ）に詳細に纏めてあるので参照して頂きたい。

またさらに、本調査研究では、韓国の大半が時事的な情報を入手するというインターネット『ネイバーニュース』の過去5年間の対日的な報道の実態を調査した。その結果は別添2の資料集『インターネット『ネイバーニュース』における2002年度～2006年度韓日摩擦報道の主なる概要』（総330ページ）に詳細にまとめてあるので参照して頂きたい。

そして、こうした2つの調査研究結果の相関性、即ち、韓国における対日的な報道の実態と、韓国の若者の反日的な関心事・認識の動向性との相関性の検証を試みた。その結果は、別添1の中の1-5の「韓日摩擦報道と反日カフェ結成の様相」に明らかであるが、それは例えば、獨島問題についての報道の時期と獨島問題関連のカフェの結成数を見ると実に明確である。2002年度から2006年度にかけて、3大サイトに結成された獨島問題関連のカフェの総数は1303個であり（Cyworld111個・Daum 867個・Naver 325個、別添1の中の1-4参照）、この5年間の獨島問題の報道集中期に1266個の獨島問題関連の反日カフェが結成されている。つまり、その数は97%にも及んでいるのである（他の歴史教科書・靖国・慰安婦の問題の場合はだいたい60%ぐらい）。

本研究における結論として次のようなことが言えるであろう。

1. 日本側による対韓的な言動が、韓国の青少年のオフラインの日常のみならず、オンラインの日常であるインターネットの世界でも報道され、さらにそのオンラインの日常空間にあってネガティブな方向に拡散し・しかも記録として残されるという、韓国青少年のインターネット世界における反日的なリアクション及び認識の増幅という現象が生じている。
2. これは、裏返して言えば、オンラインの発達した現今において、日本側による対韓的な言動の持つイフエクトが、以前よりも、かの如く増幅しているのだと言えることになる。
3. つまり、こうした新たな現状に対する認識が欠如され続けたならば、今後 歳月の経過により世代交代が進んだとしても、日韓の関係の発展はさほど期待し得ないだろうという一側面が考察されるのである。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）：

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）：

題名： インターネットの世界における韓国青少年の日本観に対する調査研究  
－ 反日的な認識と動向性の分析と考察を中心に －  
発表者名： 夫 伯  
論文掲載誌： 日本文学報  
掲載時期： 2009年8月頃予定

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）：